

尼提

芥川龍之介

青空文庫

舎衛城しやえいじょうは人口の多い都である。が、城の面積は人口の多い割に広くはない。従つてまた厠溷しこんも多くはない。城中の人々はそのためたいていはわざわざ城外へ出、大小便をすることに定きめている。ただ波羅門ばらもんや刹帝利せつていりだけは便器の中に用を足し、特に足を労することをしない。しかしこの便器の中の糞ふん尿にょうもどうにか始末しまつをつけないければならぬ。その始末をつけるのが除糞人じよふんにんと呼ばれる人々である。

もう髪かみの黄ばみかけた尼提にだいはこう言う除糞人の一人である。舎衛城の中でも最も貧しい、同時に最も心身の清しやうじやう淨じやうに縁の遠い人々の一人である。

ある日の午後、尼提はいつものように諸家の糞尿を大きい瓦器がきの中に集め、そのまた瓦器を背に負ったまま、いろいろの店の軒のきを並べた、狭苦しい路を歩いてきた。すると向うから歩いて来たのは鉢を持った一人の沙門しゃもんである。尼提はこの沙門を見るが早いか、これは大変な人に出会ったと思つた。沙門はちよつと見たところでは当り前の人と変りはない。が、その眉間の白毫びやくごうや青紺色せいこんしよくの目を知っているものには確かに祇園精舎ぎおんしやうじやにいる釈迦如来しやくかによらいに違ちがひなかつたからである。

釈迦如来は勿論三さん界六ろく道の教主きやうしゆ、十方最勝じつぽうさいしやう、光明こうみ無礙むゐげ、億々衆生おくおくしゆじやうぶじやうどういんどう、平等びやうどう、引導いんどうの能化のうげである。けれど
もその何ものたるかは尼提の知つているところではない。ただ彼

の知つてゐるのはこの舍衛国の波斯匿王はしのくおうさえ如来の前には臣下の
 ように礼拝らいはいすると言うことだけである。あるいはまた名高い給き
 ゆうごどくちようじや
 孤独こどく長者ちようじやも祇園ぎおん精舎しやうじやを造るために祇陀童子ぎだどうじの園苑えんえんを
 買った時には黄金おうごんを地に布しいたと言うことだけである。尼提にだいは
 こう言う如来によういの前に糞器ふんきを背負せおつた彼自身を羞はじ、万が一にも
 無礼のないように倉皇そうこうと他ほかの路みちへ曲つてしまった。

しかし如来はその前に尼提の姿を見つけていた。のみならず彼
 が他の路へ曲つて行つた動機をも見つけていた。その動機が思わ
 ず如来の頬ほおに微笑ただよを漂ただよわさせたのは勿論である。微笑を？——い
 や、必ずしも「微笑を」ではない。無智愚昧むちくまいの衆生しゆじやうに対する、
 海よりも深い憐憫れんぴんの情はその青紺色せいこんしよくの目の中にも一いつてき滴てきの

涙さえ浮べさせたのである。こう言う大慈悲心を動かした如来はたちまち平生の神通力じんつうりきにより、この年をとつた除糞人じよふんにんをも弟子での数かずに加えようと決心した。

尼提の今度曲つたのもやはり前のように狭い路である。彼は後うしろを振り返つて如来の来ないのを確かめた上、始めてほつとひといき一息ひといきした。如来は摩迦陀国まかだこくの王子であり、如来の弟子たちもたいていは身分の高い人々である。罪業ざいごうの深い彼などは妄みだりに咫尺しせきすることを避けなければならぬ。しかし今は幸いにも無事に如来の目を晦くらませ、——尼提ははつとして立ちどまつた。如来はいつか彼の向うに威厳のある微笑びしょうを浮べたまま、安あん庠しやうとこちらへ歩いている。

尼提は糞器の重いのを厭いとわず、もう一度他の路へ曲つて行つた。如来が彼の面前へ姿を現したのは不可思議ふかしぎである。が、あるいは一刻も早く祇園精舎へ帰るためにぬけ道か何かしたのかも知れない。彼は今度も咄嗟とつさの間に如来の金身こんじんに近づかず(とつさ あいだ)にすんだ。それだけはせめてもの仕合せである。けれども尼提はこう思つた時、また如来の向うから歩いて来るのに喫驚びつくりした。

みたびめ 三度目に尼提の曲つた路にも如来は悠々と歩いている。

よ 四たび目に尼提の曲つた道にも如来は獅子王ししおうのように歩いている。

いつ 五たび目に尼提の曲つた路にも、——尼提は狭い路を七たびなな曲り、七たびとも如来の歩いて来るのに出会つた。殊に七たび目に

曲つたのはもう逃げ道のない袋路ふくろみちである。如来は彼の狼狽ろうばいするのを見ると、路のまん中に佇たたずんだなり、徐ろおもむに彼をさし招いた。「その指織ゆびせんちよう長ちようにして、爪は赤銅しゃくどうのごとく、掌たなごころは蓮華れんげに似たる」手を挙げて「恐れるな」と言う意味を示したのである。が、尼提はいよいよ驚き、とうとう瓦器がきをとり落した。

「まことに恐れ入りますが、どうかここをお通し下さいまし。」
進退共に窮きわまった尼提は糞汁ふんじゆうの中に跪ひざまずいたまま、こう如来に歎願した。しかし如来は不相変あいかわらず威嚴のある微笑を湛たえながら、静かに彼の顔を見下みおろしている。

「尼提にだいよ、お前もわたしのように出家しゅっけせぬか！」
如来が雷音らいおんに呼びかけた時、尼提は途方とほうに暮れた余り、合がっし

掌ようして如来を見上げていた。

「わたくしは賤いやしいものでございます。とうていあなた様のお弟子でしたちなどと御ご一いつしよにおすることは出来ませぬ。」

「いやいや、仏ぶつ法ぽうの貴賤を分たぬのはたとえば猛み火うかの大小好こ悪うおを焼き尽してしまふのと変りはない。……」

それから、——それから如来の偈げを説いたことは經きよう文もんに書いてある通りである。

半月はんつきばかりたつた後のち、祇園ぎおん精舎しようじやに参つた給きゆう孤独こどく長ちやう

者やは竹たけや芭蕉ばしやうの中の路みちを尼提にだいが一人歩いて来るのに出会つた。

彼の姿は仏弟子ぶつでしになつても、余あまり除糞人じよふんにんだつた時と變つていな

い。が、彼の頭だけはとうに髪かみの毛けを落している。尼提は長者ちやうじやの

来るのを見ると、路ばたに立ちどまつて合掌がっしょうした。

「尼提よ。お前は仕合せものだ。一たび如来のお弟子でしとなれば、永久じゅうじに生死じょうじを躍り越えて常寂光土じょうじやつこうどに遊ぶことが出来るぞ。」

尼提はこう言う長者の言葉にいよいよ慇懃いんぎんに返事をした。

「長者よ。それはわたくしが悪かつた訣わけではございませぬ。ただどの路へ曲つても、必ずその路へお出いでになつた如来にょらいがお悪かつたのでございまする。」

しかし尼提は経きょうもん文ぶんによれば、一心いちしんに聴法ちやうほうをつづけた後のち、ついに初果しよかを得たと言うことである。

(大正十四年八月十三日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年2月1日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

尼提

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>